

人権啓発ネットワーク大東機関誌 第15号 2019年8月

ぬくもり

編集と発行 人権啓発ネットワーク大東

〒574-8555 大阪府大東市谷川1丁目1番1号

電話072-870-0441

FAX 072-872-2268

夢を叶えたやんちゃな歌姫



～こえを取りもどした声楽家～



2019 ヒューマンコンサート 3月9日(土) 於: サーティホール・多目的小ホール

青野浩美さん

今回のヒューマンコンサートは、声楽家の青野浩美さんにお越しいただきました。ご自身の経験やそこから気づいた大切なこと、そして素敵な歌声をわたしたちに届けてくださいました。

青野さんは、小さいころから歌うことが好きで、声楽を学んでいました。でも、23歳のとき、病気によって寝たきりの状態になったそうです。食事やトイレ、寝返りなど、すべての行動に介助が必要となりました。そのときの気持ちは「なさけない、つらい」というものでした。半年間入院をして、起きあがったり、着替えたり、車いすに乗ったりするリハビリをされました。退院してからは、車の運転もできるほど回復されたそうです。

青野さんは、「自分のやりたいことをやりたい！歌いたい！」と思い、車いすに座って歌を歌い始めました。座ったままでも声が出やすいように、車いすのデザインを工夫し、歌うことができるようになりました。

しかしその後、無呼吸発作を発症し、人工呼吸器をつけて生活することが必要になりました。人工呼吸器をつけるためには、気管切開をしカニューレという管を気管に入れなければならず、それは、声が出せなくなるということを意味していました。人工呼吸器をつけるかどうかを友だちに相談したとき、「命と声を天秤にかけるとか！」と言われたことで「命さえあれば、何か可能性はある！」と自分の考えが変わりました。

人工呼吸器をつけた後、青野さんはカニューレの中でも声を出せる可能性のある「スピーチ・カニューレ」という存在を知りました。しかし医者からは、「スピーチ・カニューレをつけても、元の声にもどるとは限らない」「歌うことは無理だと思う」「前例がない」と言われました。でも、青野さんは「前例がなかったらつくればいい」「今まで誰もいないのなら、自分がなったらいい」「チャレンジしてもいいんだ」と思ったのです。



その後、さまざまな工夫とチャレンジで、歌を歌うことができるようになった青野さんは、ご自身の経験から大切なことに気づきました。それは、「この先どうなりたいかは自分で決める。生活していくのは自分だから」「型にはまらず、一人ひとりに合ったものがある。そんな社会になる必要がある」「このカラダは、わたしに会いをくれた。このカラダで幸せ。家族・友だち・仲間がこう思わせてくれた」と強く語りました。

現在は、言語聴覚士という新たな夢に向かっていくことを笑顔で話されている姿が印象的でした。そして、話の合間に、素敵な歌をたくさん聴かせてくださいました。歌に込められたメッセージが青野さんの生きてこられた話と重なり、心に響くコンサートでした。

(レポーター：ケロちゃん)



特集「ハンセン病」

今年度前半、人権啓発ネットワーク大東では、連続的にハンセン病について企画をし、学び交流してきました。約 90 年間の誤ったハンセン病患者への隔離政策により、深刻な差別被害を受けたとして、2001 年 5 月、国から元患者への損害賠償と謝罪が必要との判決があり、これまで補償が行われてきました。そして本年 6 月 28 日には、熊本地裁に集団提訴された「ハンセン病家族訴訟」で、ご家族にも勝訴の判決が初めて出されました。元患者同様ご家族にも深刻な被害があり、賠償・謝罪が必要とする画期的な判決です。7 月 9 日には国が控訴を断念し、この判決が確定しました。

そこで「ぬくもり」でも前 14 号の「北山十八間戸訪問」に続き、今号は「憲法週間記念行事」について、そして次号には「市民・会員交流フィールドワーク（元収容施設訪問）」について特集します。

大東市憲法週間記念行事

知っていますか ハンセン病

『あん』上映会

5 月 11 日（土）、大東市民会館のキラリエホールで憲法週間記念行事が行われました。今年は「知っていますか ハンセン病」というテーマで、ハンセン病をモチーフにした映画『あん』が上映されました。



永瀬正敏さん演じる千太郎のぶっきらぼうな演技が「この人の人生には何かあったはず。」と思わせます。そこに樹木希林さん演じる徳江さんが登場すると、観客から軽いどよめき（感動!!）が起こりました。業務用のあん（餡）を使用していた千太郎にあん作り 50 年の徳江さんが、本物のあん作りを指導していきます。

千太郎の経営するどら焼き屋の描写が続く中で、瞬間、徳江さんの手がアップになりました。大きくこぶのようになっています。そこから徳江さんはハンセン病（元患者）と気づかれます。見ている私たちはこの後の展開に不安とドキドキが押さえられません。こんなに愛らしい徳江さんがこの後、不幸な展開になるのはつらい、という思いです。一時は行列のできたこの店も、ある日から誰も買いに来なくなりました。ハンセン病（元患者）の徳江さんの作るどら焼きは、いくらおいしくても買う人がいなくなったのです。数日後、徳江さんは、店を辞めました。

自分の無力感に襲われた千太郎は、店に出入りしていた女子高生ワカナと共にハンセン病（元患者）の人たちが住む多摩全生園に行き、徳江さんと再会します。多摩全生園の描写に何ともいえず、感動します。言葉にできませんが。何十年も閉鎖された世界です。

その後、徳江さんが亡くなり、残された録音テープでこう語ります。「このあなができるまで、小豆がどんな世界を過ごしてきたのか、どんな空気に触れて来たのか、どんな空を見て来たのか、どんな風にあたって来たのか、考えるの。」（細かな表現は異なります。すみません。）このセリフに、人間・作者・ハンセン病（元患者）の人生観が投影されているように感じました。ゆったりした音楽が流れています。どんな人間も生まれてきた意味がある。生きているだけで意味がある。そんなメッセージを感じ、映画が終わりました。

上映後、帰途に就く人の感想を聞いていると、「よかったなあ。感動したなあ。」「やさしさを感じる映画だった。」「ストーリー自体は地味なのに、初めから終わりまで集中して観ていた。」「あんな優しい人がいて、ぼくらが生きていけるんやなあ。」などの言葉が聞こえ、再び泣いてしまいました。

ドリアン助川さん講演会

翌日、『あん』の原作者ドリアン助川さんの講演会が、大東市立生涯学習センター・アクロスで行われました。整理券は前日までにすべて配付されました。助川さんは、ミュージシャンとしてまったく売れなかった時代のライブで、元ハンセン病（「元」がポイントです。ハンセン病は根治します!!）の二人の方と出会い、多摩全生園に招かれ、後に本を書くに至ります。「どうしても、このことは書きたいと思った。」とお話されました。『あん』にまつわる講演会を全国で実施し、ある学校で樹木希林さんが生徒に意見を求め、何も話せない生徒に抱きつき、ご自身の胸をたたいてみせながら「あなたの言いたいことはここにつまっているのよね。」と言われたというエピソードでは会場の多くの方が涙しました。大出版社に原稿を持ち込み 11 回も書き直しを指示され（それも一からの書き直し!!）、最後には「この本はどんなによくなっても採用しない。」と言われたとお話されました。それでも、助川さんはこのテーマは絶対に書くんだという強い意志をもち続けたそうです。執念を感じます。

憲法週間記念行事の映画『あん』とドリアン助川さんの講演を聞かれた方々の満足感はかなりのものであると確信します。徳江さん流に言うと、お月さんに「ありがとう」と言いたいです。

（レポーター：がんちゃん）



人権啓発ネットワーク大東とは

近年、子ども・障がい者・高齢者等への虐待や特定の民族に対する憎悪表現など多くの人権問題がニュース等で取り上げられています。社会環境が大きく変化し、まだまだ「人権」が尊重されていない状況が現在の日本には存在しています。

大東市では、人権尊重のまちづくりをめざし、市民による市民のための自主的な組織として「人権啓発ネットワーク大東」が2013年4月1日に設立しました。

目的

一人ひとりが生まれながらにもっている基本的人権が尊重される社会の実現に向けて歩み続けるため、自らの人権意識を高め、お互いの人権を認め合うとともに、わたしたち市民が行政と協力して、人権啓発活動を積極的に行い、人権尊重のまちづくりをめざす。

活動内容

- ・自らの人権意識を高めるための研修会などへの参加・参画。
- ・人権尊重の理念を広く市民に広げるための啓発・広報活動など。

★ 会員募集

— 活動内容 —

人権意識を高めるための研修会などへの参加・参画。
人権尊重の理念を広く市民に広げるための啓発・広報活動など。
会費等はありません。



NEW

Facebook(フェイスブック)

人権啓発ネットワーク大東の活動がみなさんに届くよう、
Facebook ページを開設しました！ぜひ、フォローお願いします！



(Facebook で「人権啓発ネットワーク大東」を検索！↑)

★ ヒューマンライター

大東市で人権推進につながる取り組みを行っている方々の取材をしていただける方
(ヒューマンライター) を募集します。

TEL : 072-870-0441

FAX : 072-872-2268

編集後記

「人権啓発ネットワーク大東」って、長い名前ですね。市民の皆さまに、より親しみやすく参加していただくために、「愛称」や「マスコット・キャラクター」を創っては？という話をしています。「こんなのどう？」「私も創りたい」という方は、ご一報いただくと嬉しいです。 広報委員長 井上 明博